

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
7月号

通巻551号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年7月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



山桃の赤黒き実の甘くして
酸味ゆかしく初夏の味する
房子

あじさい邑のヤマモモ

矢追房子さん撮影

再録 昭和41(1966)年6月23日発行『すさのお』第6号より

日本古代宗教と大倭の教え (上)

法主 矢追日聖 (満54歳)

法主寸言

自分の信仰する宗教に自信をもっている人が殆んどですが、自信が強すぎて、互いの宗教をけなしたり押しついたりするのは困ったものです。

どんな宗教であれ、互いの人格が向上すれば、それでいいのではないのでしょうか。

あなた、お読みになりましたかね。今月十五日、東京のフェイス出版株式会社から『紫陽花邑』という単行本を出してくれました。必ず読んで下さい。この本を読めば、大倭の宗教のあらましは分かるだろうと思います。

昨年の七月十三日でした。「フェイス社」から取材のため、若い今井国蔵さんが特派記者となってお越しになったんです。期間は僅か五日間ではありましたが、大倭一門の者と生活を共にしたのです。彼の眼に映った日々の有りの儘なる紫陽花邑の現況を記されたのが、「大倭の地に紫陽花邑を訪ねて」の一文でありました。

大倭のことについて何も知らない人々には、この一文は現在の大倭を知る窓口としては、非常に役に立っていると思います。記者その人も、初めて見た大倭の紫陽花邑なんですからね。

終戦と同時に大倭教の名のもとに出発した意味も、私の半生を讀んでいただけばよく分かるでしょう。

その後の流れは、昨年八月、終戦満二十年を記念して書きました「あしあとをきざむ——昭和史とともに——」の所（『すさのお』）と並行して出されていた『大倭新聞』第13号）で年を追って述べておきましたので、その大略はつかめるところです。

更に、（大倭新聞第9号の）「やわらぎの黙示」では、私が感得した「神ながら」の哲理とでも言いましようか、そうしたものを端的に出しておきました。（どちらとも、野草社刊ことむけやはす『やわらぎの黙示』所収）

恐らくお分りになる方は少ないと思うのですが、その一部分でも理解のできる所があれば幸甚に存じます。その他、『大倭新聞』なり本紙などで、その時その時の思いつきを書いたのですが、もうこの辺で殆んど主な所は言いつくしたと思うんです。荒けずりの大倭像はほぼできたとも言えるのです。

霊界人と交流

世界には色々の宗教がありますが、神ながらに基づく大倭の宗教は、神道、仏教、キリスト教などのような、既に宗教として形のできているものから分かれて、新しく発生したものではありません。矢追日聖という一個の人間が、大宇宙の気（心、自然神）から受けた感応や、また大倭の祖神達（人格霊、大倭神宮）からの垂示と、矢追家に流れてきた宿命などが一つになって、日聖を中心とした大倭が今の代に現われてきたと言えるのです。

言いかえれば、今から千三百年、否、もっと前の時代、支那の方から儒教や仏教などが、我が日本国へ渡来する以前の我が国（大和中心時代）にあった土俗信仰、つまり日本の古代社会に於ける

民族宗教みたいなものが、今の代に、日聖という人間を通じて再現してきたとも言えるのです。

この古代社会で、かなり指導的位置にあった霊界人が、神（宇宙、自然）なるものの心と、それに添った信仰態度などを私に話しかけてくるのです。私は及ばずながら神意に添うような自分をつくるため、かなり努めてきたつもりです。情けないことですが、今あなたが見る如き私の程度しかできていませんが、死ぬ頃になれば、今よりは少しましになる自信だけはもっています。

このような訳ですので、大倭教は、遠く平和な古代社会に実在していた宗教を、その頃の多くの霊界人が矢追日聖と名のつく人間に直接伝えてきたものと言えます。

私と人間的結びをもたれる方は、知らず識らずのうちに、私に似通う人間性を望んでいると思います。そうあってほしいのです。

第一の関門

大倭で示される人間像とは、誰とでも仲良くゆるめるような人、これが第一関門です。

先ずあなたは、狭い社会、つまり親子、兄弟といったせめて血のつながっている家族や親類だけでも、いがみ合わないで朗かに暮らすように、やってみてはどうですか。自分で自分を治めること

が第一条件でしょう。これができてくれば神意に添った幸福な家庭ができます。言うことは簡単ですが、行うことは難しいことです。

こうした意味において、自分を治める方法として、何千年の昔から、色々な人々が言い遺してくれた言葉が数知れぬほどあるのですが、山なす此らの金言を知ったからといって、金言通りの人間には中々なれないものですね。有名な学者であっても、また宗教人であっても、自分を治めることのできている人は少ないと思います。

教典の弊害

仏教教典やバイブルなどを讀んだからとて、どれだけ自己を治めるのに役立ってきたでしょうか。肝心の人間釈迦や人間キリストを忘れて、その弟子達のつくったお経やバイブルのような、書いたものを唯一の宝物として修養する。それは知識で捉えて入ってゆくことになり、互いに自分の考えを守るといことになって、かえって、自己を治めるどころか、部派分裂をおこして争うべき人間を作ってしまう。

世界に宗教はいつの時代にも沢山ありました。宗教があつて平和な社会が出現したという事実を、過去の歴史の中から見出すことができるでしょうか。（つづく）

再録 昭和41(1966)年7月23日発行『すさのお』第7号より

日本古代宗教と大倭の教え (下)

「ちめらみこと」

我が国の古代社会では、釈迦やキリストといっ

た特定の教主のような人は現われもしなかったし、また必要ではなかったとも言えるのです。

その訳は、その頃の社会でも今と同じ多種多様な指導的立場の人々がいたのです。これらの種々

な頭になる人々のことを「すめらみこと」と言いました。

今流に言えば、天皇、各大臣、府県知事、各種団体長、学校長、会社社長というような位置にある人々のことを指しているのですが、古代社会では自分を治める能力をもっている人でなければ「すめらみこと」にはなれなかったのです。それが今流とはちがって、中々きびしいものがあつたのです。

私を例にとつてみれば、今の私は、大倭の代表者になっていきます。或いは、人は大倭教の教祖さんだと言います。言わば私は大倭教団の「すめらみこと」であると同時に、紫陽花邑の「すめらみこと」でもあるのです。

私には教団の長だの、紫陽花邑のような集団生活などを創めようなんて、そんな下心はもうとう無かったのですが、人力の及ばないきびしい力で、今のようになってしまった訳です。

なろう、させようといった人間の意志よりも遙か高い所から作用してくる、神ながらの力が「すめらみこと」を作つてゆくのです。

霊能の活用

古代の人々、中でも特に「すめらみこと」になる人は、自分を治めることと、平和なうるおいのある社会をつくつてゆくコツのようなものを体得していました。今の人のように学問を研究して得た智識によってやるといふんじゃなくて、いづれも霊的感応によって得たものです。

このコツを体得する世界が、現代流に言えば、宗教になるのではないかと思えます。だから古代社会の各種の頭になる人は、その人なりの内から出てきた宗教的なものを確実につかんで、それを

現実社会に活用したと私は見ています。つまり生きた宗教をもつていたのです。

ここで私がいう我が国の古代社会とは、神武紀元以前の時代に遡るもので、主として大和を中心とした地方の意味であることを御了解下さい。釈迦やキリストの御降誕より遙かに古い時代の話なんです。

法主寸言

世に信じられていた宗教はたくさんあります。

宗教と呼ばれなくても、正しいと信じられていたものは、広い意味で宗教と言えます。

あなたは、大倭教の何を正しいと信じているのですか。

祭政の一致

この頃の人々は特に、霊的感応が勝っていたので、霊界の人々（人格霊、神社などに祀られている神）と常に交流をもち、現界人も霊界人も共に助け合つて、楽しめるように、日々話し合つて暮らしていました。私は現在そのような暮らし方をしています。こういうような実態を、後世の人々は「祭政一致」という言い方をしたのでしょう。

若し、こんな霊界や現界（人間世界）によく通じている人々が沢山いた社会に、釈迦やキリストがいたとすれば、恐らく彼らは平凡な存在で、左程めだたない、昼に行燈をつけたようなものだったと思います。

それは、古代人は智識でものを知るといふよりも、霊的感応によって神ながらの法（宇宙の大真理）をつかみ、それを実生活の中に生かす神ながらの道を知っていたからです。

私は現代を古代社会に引き戻そうとしているのではありません。物質文明の高度に発達している現在ではありませんが、何とまあ精神文明の低いことに歎きたくなるのです。これは独り私だけではなく、心ある人々の心でもあるでしょう。

そこで日本の古代人がもっていた高度な精神文明を、その裏付けに引き出してこなければ、地球上の人類は凄惨な憂き目をみなければならぬことになるでしょう。

日本領土に原爆投下、もうこれだけで沢山です。もうこの辺で全面的に止めなければ、人間世界に於ける近代文明をみて、霊界人は笑っているかも知れません。

あなたは、何かの宗教に入っているでしょうか。その宗教が、あなたの家族全員にどれだけの喜びを与えているか、家族一人一人の精神的向上にどれだけの力になっているか、反省せられたことがありますか。

古代人の方が高い精神

私は、古代人の方が現在人より遙かに高い精神文明をもっていると断言しています。言っている私の精神内容が、古代人そのものと私は言いたいのです。

私に接した時、あなたが受ける私の言動から来る人間味や人柄、気持の動きなど、そうしたものが古代人そのまま思っていたら、大した誤りはないと思います。

宗教戦国の世に「紫陽花邑」あり

時代の流れと共に、宗教はかなり本質的なもの

から遠ざかりつつあります。そして寺院、教会など、その壮大さを競い、信者の取り合いに明け暮れている様相に見受けられます。まさに宗教戦国の世、群雄割拠の暗黒時代を思わせる今の世の片隅に、「紫陽花邑」が小さいながらも生き生きと実在しているのです。

邑人住人は、無神論者、神道、仏教徒、キリスト教徒、色取り取りの人間の集まりです。なのに仲良く暮らしている事実は否定できません。古代社会に流れていた宗教が、邑人の心の中に生きています。これを大倭教と言っているに過ぎません。

(昭和四十一年六月十日、日聖記)

大倭会文化行事報告

◇第329回 平成28年4月17日

京都嵯峨野に和の光を訪ねる

大阪府枚方市 林 修 三

前日の天気予報は大雨、突風、雷と告げていた。参加キャンセルの電話もあり、幹事としては少々心細い思いで眠った明け方。いつもウツラウツラするこの時間帯に、私の場合何となくさざやかな霊界通信がある。文化行事は(顕幽界の)皆で行くもの」と、鈴月かあさんか?中西元大倭会会長か?私にはそう聞こえた。「そうやなあ」と独りごち、自分自身の一人芝居の得心かと思えた瞬間、法主様より『足利の家紋を見よ』とも聞こえる。足利と言えは、本日訪れる京都嵯峨野の「宝篋院」には楠正行公(正成嫡男)と共に、足利二代將軍義詮公(尊氏嫡男)が並んで眠っておられるのだが……。

目覚めてすぐにパソコンに向かい、「足利氏・家紋」と打てば①の引両紋が出た。これは正しく法主様の矢追家と同じ家紋。由あって長い間の正行ファンのは私と思わず、心の奥深く足利義詮公に対する思いが足りなかった事を反省。敵、味方一如の「和の光」の精神にもう一度思いを致す。

夜来よりの雨もあがり、霧雨の様な空模様の中、JR嵯峨野線「嵯峨野嵐山」駅頭に集まれた方々は私を含めて六名。和氣藹々と歩いて二十分弱の宝篋院の道をたどる。春の観光シーズン、一等行楽地の嵐山界限もさすがの天気予報に閑散とした風情であった。十一時過ぎ、宝篋院に到着。空は晴れ模様が変わっていた。

宝篋院は平安時代に白河天皇により建立された古刹で、それ程大きな寺領地ではないが、回遊式の美しい庭園もあり、品格のあるもの静かなたずまいである。寺内を覆う楓の青紅葉が光に映え美しい陰影を描き出していた。しかも、他に参拝客はなく貸し切り状態であった。

貞和四年(一一四八)正月、正行公は四条畷の合戦で北朝の大軍と戦い、二十三歳の若さで討ち死にされた。その時、正行公の禅の師、夢窓国師の高弟であった黙庵禪師は公の首級を自分の寺である善入寺(宝篋院)に持ち帰り葬った。後に、同じく黙庵に私淑していた義詮公がこの話を聞き、日頃黙庵より知らされていた正行公の人となりに感銘を受けていた事もあり、自分もその傍らに葬ってくれる様に願った。

そして平成の今も、南北朝を代表する一人の敵、味方の武将の墓が、ここ宝篋院の奥庭にひっそりと隣り同士で並んでいる。

正午すぎ宝篋院での参拝を無事に終えた私達は、すぐ隣にある「清凉寺」境内の名物餅をいただき口祭りも終え、続いて近くの「二尊院」の自



向かって右が楠正行公の墓、左が足利義詮公の墓

然を楽しみ、次に「落柿舎」を訪れる。ここは芭蕉の門人去来の住まいした、俳人のあこがれの地の一つでもある。しばし湯浅宗匠始め一句ひねってはみたのだが……。そして私の昔の行きつけの「あかまんま」での食事会となった。後、さすがに人も多くなつた道を歩き、桂川にかかる渡月橋を渡り観光気分にはたりつつ、結局、天気予報を大きく裏切った不思議なほどの快晴のもと、文化行事を無事に終えることが出来た。

春嵐過ぎ 和の光射す 嵯峨野かな 修三

◇第330回 平成28年5月22日

文化行事に参加して

奈良県生駒市 安達直美

私はずいぶん前に「司馬遼太郎記念館」に参加した時以来、久しぶりの文化行事参加。ワクワク！近鉄新田辺駅に集合。今日は「新緑の一休寺酬應庵」。歩き組と自家用車組とが現地にて合流。総勢13名。

幼い時から知っているトンチの一休さんが、人生の後半を過ごし88歳で亡くなられ、ここに葬られている。緑の香り漂う参道を、一休さんの彼女の話を聞きながら歩む。沙羅双樹の木に丸い固いつぼみがいっぱい。白い花が咲き揃った時の様



撮影者：高橋良美さん

子を思い浮かべる。庭園が美しい方丈では、ちょうど法事が営まれていて、お寺や庭の解説は受けられず残念。ぶらりとゆつくり開山堂や本堂を巡る。一休さんもこのあたりをブラブラ歩いていたのかな。開山堂の横の池では睡蓮の花がふんわりと咲いていた。

門の所で全員集合の記念写真をととり、山瀬恵子さんの案内で楽しみのランチへ。日本茶専門店の「マイコティーブティック」にて、茶蕎麦や抹茶のフルーツパフェなど、思い思いに注文。話し合いながら、笑いながら賑やかに食事。「オナカヘッタ」と言っていた昇ちゃんも満腹になりごきげん。ダイエットの話し、ドクダミ茶の作り方等、様々な情報交換をして楽しいひとときが過ぎた。前からの知り合いの方も、今回初めてお会いする人も、和やかに交流する文化行事、いいですね！

◇第331回 平成28年6月19日

梅雨の国立民族博物館（大阪吹田）

岡山県真庭市 湯 浅 芳 郎

梅雨の文化行事は美術館、博物館に素晴らしいものが待っている。小生、岡山から大阪に前泊、大阪モノレール「万博記念公園駅」に集合。雨模様で心配したが、参加者10名。30年程前の文化行

事で来たはずだが、迷いながら「民博」へと歩く。奈良からの参加者は、昇ちゃんに付き添い、「介護タクシー」で到着。

国立民族博物館はパンフにあるように「諸民族についての認識と理解を深めることを目的」に昭和52年（1977年）に開館した。千里万博（1966年）の跡地にできたもの。今日はロビーで「音楽の祭典」があり、入館料無料の日、ラッキー。世界の音楽を先ず聴く。これは一日中続くので1時間で切り上げ、館内食堂へ。エスニック（民族）料理。小生はベトナム料理・ベトナムビールで乾杯。

その後、三々五々館内の見学を始める。館内は広大・多種多様です。東南アジア、西アジア、アフリカ、オセアニア、ヨーロッパ、アメリカ、南アジアのゾーンに分かれている。125万年前、人類がアフリカに誕生して以来、色々な状況下、大移動や小移動があったのでしょう（いわゆる2万年前からの「グレートジャーニー」）。※編集部注 人類が世界中に拡散した旅のこと。今年の大倭会文化講演会の講師は、グレートジャーニーの軌跡を辿ったという探検家・関野吉晴氏です。気候大変動や火山活動のため、アフリカから、赤道直下のアジアから船や沿岸伝いに移動したのでしょうか。そして、その地に居ついた民族、早期に移動した民族、後発で移動した民族などの間で壮大なドラマがあったはずですよ。

特に感じた所は、「祈る」「異界との交流」の展示。先住民は自然の中に精霊のはたらきをみとめ、人間や動物にも精霊が宿ると信じてきた。そして異界における見えない存在との交流を図ること、その恩恵にあずかるとともに、様々な災いを避けようとした。

次はアフリカの「奴隷貿易」の現実、歴史の負



アイヌ民族の昔の復元住居

の部分。16世紀に始まるヨーロッパの奴隷貿易は、5世紀の間も続く。自分たちの正当性を主張するためアフリカを「野蛮な国」と位置付ける。現物展示の手かせ、足輪が痛ましい。新展示オープンペースは、日本の文化、アイヌの文化、朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジアの文化と盛り沢山でした。小生アイヌに興味を持ち、今『アイヌと縄文』（瀬川拓郎著 旭川市博物館長）を読んでいるところ。

歴史全体に流れている思想は「源郷の思想」、何か大元は一つに思えてくる。そして分流した世界は、実に多様性に満ちているが、戦争やテロの多発する現代のあり方。これからの時代の進むべき方向は？

「仲ようせいや（相互敬愛）」という法主さんの言葉が一番。

最後に出口近くのボックスに昇ちゃんと入りピデオテイク、「日本の漆工芸」、漆掻きから塗りまで。昇ちゃんもしきりに感心。

帰路、駅の近くでコーヒを頂きながら歓談。大勢の人の群れは、近くのサッカー場に向かう大阪ガンバの応援団でした。

世事の忙しさは大変だけれど、時には気分を変えて文化行事に参加されてはと誘います。

めじるしに 太陽の塔 梅雨晴間 芳郎

「こだま」と「こだま」①

『おおよまと』6月号を読んで

『おおよまと』6月号を読んで

北海道小樽市 守谷 明 宏

— 猿賀神社のこと —

古くからの友人で地方新聞販売所の社長をしている人がいます。私の住んでいる地域を販売エリアとしているのですが、販売所エリアのみのミニコミ紙を毎週だしています。以前その紙面に、地域の歴史を書く連載を私が約1年担当した事があります。それが小冊子になり購読者に配布され、市内で書店販売にもなりました。今回、17年ぶりにその改訂版連載を始める事になり、今は原稿を書きつつ再調査をしています。

札幌の定山溪といえは温泉街で有名なのですが、実は定山というお坊さんが開いた湯治場が発祥です。そこを拓く前の江戸末期は、鯨漁で沸く小樽に住み読経や祈祷などをしていました。小樽でも湯治場を拓いたりしていましたが、明治になつて姓を名乗る時、「美泉」としました。子孫は現在名古屋にお住いのはず。

我家の近くにある海辺に、その定山和尚が揮毫と魂入れをした「太平山」という石碑とともに数基の石碑があり、その一つには「猿賀大権現」と彫られています。このところ、それについて調べていました。青森県平川市猿賀にある、猿賀神社は昔「猿賀山深沙大権現」といわれており、江戸時代には修験道場にもなっていたといえます。青森出身の人が建立したのか、あるいは定山和尚もここでも修行していたのかなと思っていたところに、『おおよまと』6月号で猿賀神社の記事を見

つけ、「はあ、縁があったな」という感じでした。

— 縄文人とアイヌ人 —

『日本書紀』にも出て来る「蝦夷」（えみし）はアイヌ人ではないというのが私の考え方で、アテルイ、モレはアイヌ人という人もいますが、彼らは北方との交流も深かった縄文人であり、いわば渡来人がたくさん日本にやってくる以前の日本人といえるかも知れません。

アイヌ文化という固有の文化、民族が確立するのは、擦文文化とオホーツク文化の融合の中で形成されて来るので、12世紀頃のことでしょう。その頃には蝦夷は「えぞ」と呼ばれるようになりま

す。この「えぞ」はだんだん狭まり、江戸時代は北海道を指すこととなり、それで先住民族であるアイヌ人との混同も生まれてくるのではないかと

思っています。要するに、蝦夷時代の縄文人と蝦夷時代のアイヌ人との混同です。

北海道に住んでいた縄文人たちは、北海道のただで生活していたわけではなく、大陸や本州との交易はかなり盛んに行っていたようですから、東北の縄文人たちとの交易もかなり頻繁にあっただろうし、勢力範囲として東北まで治めていたのかも知れません。今年3月三内丸山遺跡に行きましたが、あそこは縄文人たちの最大の交易拠点だったのだらうと思います。

考古学を勉強したわけではなく、興味のままだけに色々本を読んで感じただけのものですから、私の説が誤っているのかも知れません。

— 白虎隊の生き残り —

読んでいて、会津藩白虎隊の生き残りである飯沼貞吉（後に貞雄と改名）を思い出しました。彼は明治になって、通信省の電信技師になりました。

今のNTT、要するに私の大先輩にあたるわけです。（※編集部注 守谷さんはNTT勤務）

札幌に住んでいたのは、1905年（明治38年）1月から1910年（明治43年）3月までの5年間。工務課長として勤めていました。歓楽街ススキノを南に抜けた所に普通信省の社宅があり、そこに住んでいました。その場所は後年電電公社の保養所となり、宿泊も宴会も出来る場所でも時々利用していました。今は譲渡されホテルになっていますが、敷地の一角に飯沼貞吉の碑が建てられています。また金山徳次という人が、『札幌にいた白虎隊士 飯沼貞吉』という私家版を発行しています。古書店で購入したのですが、この本で初めて白虎隊の詳細を知りました。よく「勝てば官軍、負ければ賊軍」といわれますが、会津藩の戦後は悲惨そのものです。

小樽市の隣町は余市町というところで、NHK朝の連続ドラマ「マッサン」で有名になった所ですが、明治政府が旧会津藩士たちを入植させたところでもあります。そして、林檎を日本で初めて栽培したのも彼等で、その品種に「緋衣」という名前を付けています。会津藩主の松平容保が孝明天皇から下賜された「緋の御衣」がその名の由来のことです。

当時の兵部省は藩士たちを余市に入植させる前に、一時小樽の漁師の家に分散して寄宿していたので、彼らが寺小屋を開いて漁師の子供たちに読み書きを教えたりしています。小樽に残った者もいましたので、最初の所で書いた連載記事のための歴史調査には必ず旧会津藩士たちが出てきます。また、余市での林檎やサクランボの成功を見て、小樽でも林檎やサクランボを栽培する農家が多くなりました。小樽最初の司法書士兼弁護士は、この時に小樽に留まった旧会津藩士です。

寸 莎

第120回

青山 美子都さん



ダンスにひかれて

今回の「寸莎」は、若手もぜひ取り上げてという声もあって、平成六年生まれで大学生の青山美子都さんに登場してもらうことにした。大学では社会福祉を学びつつダンス部のキャプテンも務める多忙な毎日で、この取材の日程調整にも苦労したほどである。

美子都さんは青山法義さん元子さんとご夫妻の一人娘として、阪神大震災発生のおよそ一カ月前にあたる平成六年十二月十七日に奈良の西大寺で生まれた。本人は当然のことながら平成八年に帰幽された法主様のごことは全く覚えていないというが、父親の法義さんは、「生後二週間で法主さんに抱いてもらった」と話してくれた。その法義さんは、「大倭でヘソの緒を切ったはじめての男の子だから、しっかり頼む」と法主様

から激励された思い出があるという。

「五歳の時に保育所で友達とダンスをしているのを見て、自分も踊ってみたいと心が動いた。次の日に両親に頼んで富雄のスタジオであったストリートダンスの体験会に連れていってもらい、それ以来ダンスにはまってしまった」とダンスへの思いを語る。父親によれば、「それまで色々な習いごとと連れていっても、その気にならなかったのに、ダンスだけは体験会で先生に一寸声をかけられたらスツと入っていった」というから、彼女の体の中にあるリズムとピタリと響き合うものがあったのに違いない。それ以来、さまざまな形でリズムカルなヒップホップのダンスにかかわり続け今に至っている。

保育所時代のことを聞くと、「外で遊ぶのが大好きで、年長の時には

年下の子の面倒をみるのが楽しかった」と話してくれたが、そのことが大学で対人援助の勉強に取り組むことにつながったのだろうか。

富雄南小学校では、「勉強は好きではなかったけれど漢字には興味があった」といい、富雄南中学校では、「小学五年から英語教室に通っていたこともあり、英語が面白かった」と当時を思い出す。中学ではバスケットボール部にも入っていた。

高校は奈良育英高校に進学。「自由な雰囲気を楽しめた」と前向きである。高校一年から大学一年まではピースクラブというストリートダンスのクラブに属して発表会のための練習にエネルギーを注いでいたようである。「両親もダンスに熱中することを後押ししてくれていて、発表会には必ず来てくれていた」というから、親の理解と支援も充分だったのだろう。

反抗期はいつごろだったのかという問いに対して、「特になかったと思う」と答えてくれたが、この点を父親に確かめてみると、「その通りだけど、あえて言えば今かな」と微妙な返事を返してくれた。

現在は両親とともに大倭町の隣の菅野台に住んでいるが、「小さい時から放課後には伯母の山崎波留茂さん一家の住む大倭に来て他の子供

たちと遊んでいた」というのだが、「大倭というのは何だか面倒くさいし、あまり大倭にとらわれるのは嫌だ」という気持ちもあった」と笑いながら正直に語ってくれた。父親の法義さんが、「青春時代に何とか大倭から出たいと思っていたが、いつの間にか大倭に腰をおろしてしまったのが不思議」と以前に話してくれたのを思い出した。

美子都さんは今、大阪人間科学大学の社会福祉学科で学んでいるが、「児童福祉に興味があり、できればスクールソーシャルワーカーになって、親などからの愛情不足や虐待などで問題を起しているような子供たちにかかわる仕事をしていきたい」という将来像を持っている。大学のダンス部では「ガールズヒップホップ」の三十人近いメンバーと共に、まとめ役として活躍している。

自分自身の性格については、「好き嫌いが結構はっきりしていて、自分の意志をしっかり持っている子や明るい子が好き」と語る。グループのリーダーとしては他のメンバーに説教することもあるといふ。

好みの色は赤と黒と白とのこと。で、ひかれる花はひまわりとのこと。血液型はO型である。青春の真っ只中で、これからが楽しみである。

(聞き手 岸田哲)

あじさい日誌

6月12日 祝会。
 6月15日 大倭神宮月次祭。
 6月16日 昭和35年代の法主様の保存状態の悪い法話テープについて奈良大学名誉教授西山要一先生に相談したところ邑までお出で下さいました。
 6月17日 大倭病院吉井副院長の息子さん晴紀君が、教務本庁に遊びに来てくれました。
 6月18日 午後、交流の家でIWC定例委員会。
 6月20日 午後6時過ぎ拝殿で11弦ギターの辻幹雄さんが長崎原爆で知られる故永井隆博士の長詩「長崎の鐘」をテーマにした曲を奉納演奏されました。
 6月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成4年6月月次祭のご法話をお聞きしました。(平成24年6月号『おおやまと』に「雨の日の思い出―百姓生活の頃」として掲載分)
 6月25日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会。
 7月6日 大倭神宮月次祭。矢追家麻呂教長さんが大倭殖

東光大祭 祖霊祭 祭典のご案内

平成28年8月17日(水曜日)・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。
 正午から、奥津齋庭において祖霊祭が行われます。
 祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。
 祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭のあいだ拝殿では法主様の東光大祭のご法話や紫陽花色の記録映像等を聞いたり見たりしていただきます。

【注意】

祖霊祭の経木への書き込み受付は、7月23日まで締切とさせていただきます。

産(株)社長に就任すると皆さんに話をされました。
 夜、大倭会館で邑倭の会。

7月7日 昇ちゃん(84歳)の誕生会をカフェ「みりあむ」(店主がフランス人女性)で。
 7月10日 祝会。久しぶりに中本好子さん(広島県大崎上島町)、古澤のり子・高橋泉美さん(茨城県稲敷町)が初参加。

長崎・広島まで平和行進される日本山妙法師の一行9人が大倭会館で一泊有志が接待。



大倭安宿宛では

7月4日 今年度末の竣工を目指し、この日より本格的に救護施設須加宮寮の建替え工事が進みだしました。

(菅原園)

7月7日 七夕の集い。

(須加宮寮)

6月30日 施設訪問会で青垣園のご利用者職員が来苑。

(長曾根寮)

6月23日 (特養) 誕生会で2名(内米寿1名)の方のお祝い。

6月28日 (デイ) 工作で準備してきた朝顔を壁に貼りました。

(茂毛路園)

6月19日 卓球大会。

(八重垣園)
 6月29日 ゲームクラブ。

こだまこだま②

群馬県富岡市 西川美保

(略) 群馬も毎日ムシムシと暑いですが、畑のお野菜たちもおかげ様でスクスク育っています。雑草にも生命を感じながら草むしりをさせてもらい、自然の大きな大きな愛を受けて生かさせて頂いております。広い空を見上げると全てに感謝でき喜びを感じます。そして大倭とながっている……と思うと、心に嬉しさがあふれて来ます。ありがとうございませす。幸せです。今年もお忙しいとは思いますが経木をよろしくお願い致します。
 訂正 6月号1頁、法主様満54歳は、82歳の間違いでした。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

8月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第571回祝会
 8月7日(日) 第一日曜日になります。大倭大本宮境内の清掃神事として午前9時より。

なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

*大倭教立教開宣祭及び
 大倭神宮月次祭
 8月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*東光大祭及び祖霊祭
 8月17日(水) 上欄に詳細。

*月次祭(大本宮)
 8月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

矢追盛賢さんが帰幽されました。



お通夜までは、彼が残した仕事の一つだった大倭会館に安置され、皆さんと親しく時間を過ごしました。

平成28年6月28日早朝、大倭紫陽花色で育ち大倭殖産株式会社社長の社長を務めながら、邑の大きな柱となつてくれた矢追盛賢さんが帰幽されました。かねて療養中という事でしたが、最近まで邑の行事に顔を出される時もあったので希望を抱いていたのに……享年満67歳。

大倭殖産・矢追家合同葬として、奈良市内のならやま会館で仏式(日蓮宗)により執り行われ、通夜・告別式合わせて千人余の皆さんが参列されました。
 6月30日午後7時より通夜。
 7月1日午前11時より告別式。同日、お骨あげの後、初七日法要も行われました。(編集部)